

地名がある。この集落の位置が面白い。「ダイワン」が「台湾」であり、「カバフト」が「樺太」であれば、「ダイワン」が南にあるべきであり、「カバフト」は北にあるべきものが逆の位置にあるからである。

この地名と位置の関連のナゾ解きは、一つは地形であり、一つは集落定着の歴史であるようだ。まず、地形は両地とも馬場目川の氾濫原で、公簿上の字名はいずれも「中川原」であることである。

この集落は、川の中洲に自然に土が寄ってくると、猫の額ほどの耕地を拓き、やがて住居を構えた開拓集落である。そして、その形成は北が南より早く、北は明治28年頃、南は同年38年頃とされている。

この2つの関わりをみるとナゾは解けてくるようである。明治28年は日清戦争、38年は日露戦争。「ダイワン」も「カバフト」もこの戦いの結果がもたらした新開地の地名であった。両地の位置が南北違っていることもうなずかれる。

地名のルーツは単純そのものであるように思う。

秋田地名研究会 会報第3号

五地目町石川富司

たかだ

八郎潟 川崎 ^{たかだ}高田

「高」は低地に対して小高い土地を指す。「田」

は田圃^{たんぼ}の他、土地という意味がある。

(1987年三浦鉄郎著 新編・秋田の地名)

たかおかーさん

^{たかおかさん}高岳山 (高岡山) 標高221.4m

たかおかーさん

八郎潟町と琴丘町、五城目町にまたがる山。古来より山岳信仰のあった山。南側麓には縄文中期の遺跡、沢田遺跡があり、東側には戦国時代のまで秋田郡を治めていた千葉氏、三浦氏の居城、浦城

があった。

現在の副川神社は新野直吉が彼の著書の中で述べているとおり、江戸時代に秋田藩主佐竹氏が「近世に久保田城北門の守護のため再興されたもの」であり、本来は古代山本郡の神宮寺にあったとされている。常福院の脇に参道があり、30分で頂上にたどり着く。丸木の階段を約400段程登った所で少し平坦な道となる。ここに中の鳥居が建ち、その手前左右に高さ2m程の石灯籠が2本たっている。これは八郎潟を航行する船の安全のために山本郡と秋田郡の奉行が交代でこの火を絶やさないよう管理していた永久常夜燈であると言われている。ここからさらに300m登ると頂上にたどり着く。中の鳥居とそこから少し登った所は視界が開け八郎潟町や大潟村、男鹿半島が眺望できる。山頂に副川神社がある。ここには珍しいプラスチック製(水道管?)の灰色の鳥居が建っている。近くには太平山三吉神社のお堂がある。

数年前、山頂の西側に眺望広場が作られ、木製の展望台が設置された。ここから八郎潟が一望できる。琴丘町側と五城目町側は木の陰に隠れ残念ながら見えない。

副川神社の裏手には、山頂を示す石塔と、むらくもの滝に通じる尾根伝いの山道がある。

山頂の石塔には「北緯39度58分24秒3、統計140度5分26秒5 標高221m40、730尺6寸 高岡尋常小学校 内務省面潟工場 昭和8年8月 小野金治、成澤三郎」と記してある。

1999年9月。八郎潟町の有志により浦城本丸跡に石塔が建立されている。石塔の背面には建立に協力していただいた八郎潟青年者異業種交流会「メビウス」と「歴史と文化を語る会」それに「八郎潟町の有志」と刻まれている。おそらくこれが初めて建立された可動式の石塔であろう。

作者

たかおかーさん

伴信友の『神名帳考証』には「この山をまた尾保呂長根ともいう。播磨の^{ひろみね}広峰神を移し祀るといい、土地の習俗では^{ごずんとう}牛頭天王と称す。」と記し